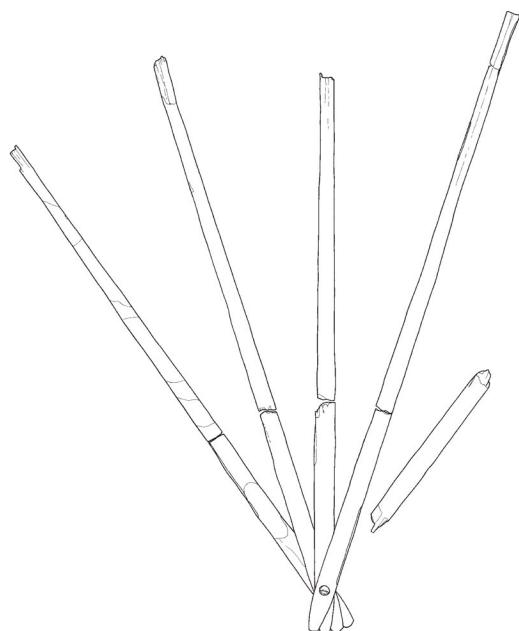


# 友杉遺跡発掘調査報告

— 公害防除特別土地改良事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告IX —

第一分冊



2010年

財団法人 富山県文化振興財団  
埋蔵文化財調査事務所

卷首図版 1



遺跡全景

卷首図版 2



SI801B13出土土器



上 SI675A4出土土器 左下 谷C6出土扇 右下 谷C6出土铸型

巻首図版 4

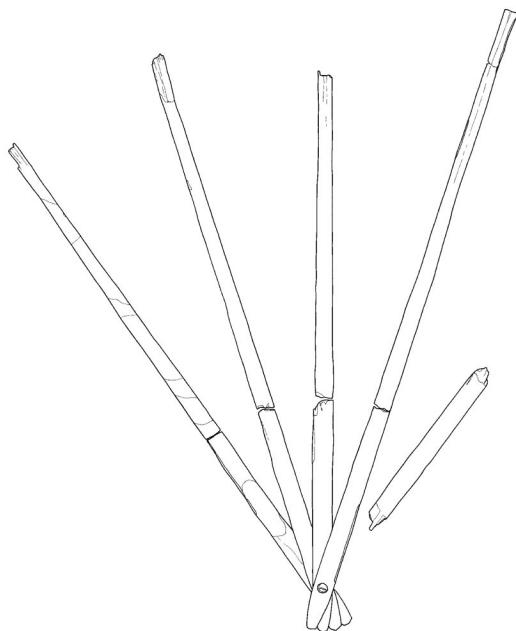


上 SK916C6木棺出土状況（東から） 下 C4地区中世全景（南から）

# 友杉遺跡発掘調査報告

— 公害防除特別土地改良事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告IX —

第一分冊



2010年

財団法人 富山県文化振興財団  
埋蔵文化財調査事務所



# 序

友杉遺跡は富山平野中央部の神通川右岸に位置し、その背景には雄大な立山連峰が聳えています。

当財団では、県営公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を継続してまいりました。本書は平成15年から4年間にわたる、その調査成果を報告するものです。

周辺では任海宮田遺跡をはじめ、南中田遺跡など古代から中世にかけて営まれた集落が数多く調査されています。友杉遺跡もそのひとつであり、古代の竪穴建物群や中世の掘立柱建物群のほか、この地域では初となる弥生時代後期の竪穴建物を確認しました。

また副葬品をもつ中世初期の木棺墓がみつかり、中世の埋葬形態や葬送儀礼を知る貴重な資料となりました。

本書が地域の歴史を知る一助となり、文化財の理解と保護に役立てば幸いです。

最後に、調査にあたりご協力いただきました関係機関および各位に、厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

財団法人富山県文化振興財団  
埋蔵文化財調査事務所  
所長 岸本 雅敏

# 例　言

- 1 本書は富山県富山市友杉地内に所在する友杉遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は富山県（農林水産部）からの委託を受けて、財団法人富山県文化振興財団が行った。
- 3 本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。

調査期間	平成15（2003）年5月9日～12月24日
	平成16（2004）年5月12日～12月21日
	平成17（2005）年5月12日～10月27日
	平成18（2006）年5月15日～9月26日
整理期間	平成19（2007）年4月1日～平成22（2010）年3月10日
- 4 本書の編集は中川道子・町田尚美が担当した。本文執筆は中川・町田の外、永井三郎が担当した。
- 5 整理作業中に下記の方々の指導・助言等を受けた。（敬称略）

墨書について	鈴木景二（富山大学）
中近世陶磁器について	宮田進一（富山県埋蔵文化財センター）
輸入陶磁器、鋳型について	山本信夫（山本考古研究所）
懸仏、鋳型について	久保智康（京都国立博物館）
鋳造について	三船温尚（富山大学）
砥石について	垣内光次郎（財団法人石川県埋蔵文化財センター）
石材について	赤羽久忠（富山市立科学博物館）
- 6 遺物の写真撮影は専門業者に委託した。
- 7 自然科学分析は諸機関に委託して行い、その成果について報文を得た。
- 8 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略、五十音順）

伊藤　潔、堀沢祐一、水野正好、富山県教育委員会、富山市教育委員会

## 凡 例

- 1 本書は2分冊からなる。第1分冊には本文・挿図・一覧表、第2分冊には自然科学分析・写真図版を掲載する。
- 2 本文・挿図で扱った遺構・遺物は、一覧表に掲載している。
- 3 本書で示す方位は全て真北である。
- 4 挿図の縮尺は次の率を基本とし、各図に縮尺率を示す。  
遺構 壇穴建物：1/40～1/80、掘立柱建物：1/100、柱穴：1/40、井戸：1/20・1/40、  
墓坑・土坑：1/30～1/50、道・溝：1/40・1/100  
遺物 土器・陶磁器：1/3～1/6、土製品：1/2～1/3、木製品：1/1～1/10、  
石製品：1/2～1/8、金属製品：1/1～1/3
- 5 遺構の略号は次のとおりである。  
S B：掘立柱建物、S D：自然流路・溝、S E：井戸、S F：道、  
S I：壇穴建物、S K：土坑、S P：柱穴、S X：その他の遺構
- 6 遺構番号は、調査時において地区毎に付した番号をそのまま踏襲し、その末尾に調査地区を表すアルファベットと数字を組み合わせて個々の番号とした。但し、掘立柱建物については新たに番号を付した。
- 7 遺物には連番を付し、本文・挿図・一覧表・写真図版で一致する。
- 8 遺跡の略号は01 T S - 地区名で、遺物の注記には略号を用いた。
- 9 遺物の赤彩部分、墨痕、遺構の炭化物、焼土、貼床・硬化面は以下のとおりに示す。これ以外についても図中に凡例を示した。  
赤彩  墨痕  炭化物  焼土  貼床・硬化面 
- 10 土層・遺構埋土の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修『新版標準土色帖』を参照した。
- 11 遺構一覧及び本文中で用いる遺構についての用語は以下の文献を参考にした。  
掘立柱建物：奈良国立文化財研究所1976『平城宮発掘調査報告VII』  
井戸：宇野隆夫1982「井戸考」『史林』第65巻第5号、  
北陸中世考古学研究会2001『中世北陸の井戸』
- 12 遺物についての分類と編年に関する用語は以下の文献を参考にした。  
珠洲：吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館  
輸入陶磁器：山本信夫2000『大宰府条坊跡X V - 陶磁器分類編一』太宰府市教育委員会、  
森田勉1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
- 13 遺構・遺物一覧の凡例は以下のとおりである。
  - ①遺構の埋土に切り合い関係がある場合は、備考欄に新>古のように記号で示す。
  - ②規模・法量は原則として最大値を示し、( ) 内は現存長を表す。
  - ③胎土・釉色調は前出の『新版標準土色帖』および財団法人日本規格協会「標準色標光沢版」を使用し、釉調和名は小学館『色の手帖』を参考にした。

# 目 次

<b>第Ⅰ章 調査経緯</b>	1
1 調査に至る経緯	1
(1) 試掘調査	1
(2) 本調査	1
2 発掘作業の経過	1
3 普及活動	4
4 整理作業の経過	4
<b>第Ⅱ章 位置と環境</b>	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	6
<b>第Ⅲ章 遺跡の調査</b>	9
1 調査の方法	9
2 層序	9
3 遺構	12
(1) 弥生時代	12
(2) 古墳時代	12
(3) 古代	14
(4) 中近世	78
4 遺物	272
(1) 土器・陶磁器	272
(2) 土製品	322
(3) 木製品	325
(4) 石製品	354
(5) 金属製品	363
<b>第Ⅳ章 自然科学分析</b>	(第二分冊)
<b>第Ⅴ章 まとめ</b>	411
<b>報告書抄録</b>	

# 卷首図版目次

- 卷首図版 1 友杉遺跡全景
- 卷首図版 2 S I 801 B 13出土土器
- 卷首図版 3 S I 675 A 4 出土土器、谷 C 6 出土扇、谷 C 6 出土鋳型
- 卷首図版 4 S K 916 C 6 木棺出土状況（東から）、C 4 地区中世全景（南から）

# 挿図目次

第1図	調査区割図	第69～144図	遺構実測図（中世 掘立柱建物）
第2図	遺跡周辺の地形	第145～171図	遺構実測図（中世 井戸）
第3図	遺跡分布図	第172～175図	遺構実測図（中世 墓坑）
第4図	基本層序模式図	第176～196図	遺構実測図（中世 土坑）
第5図	模式図作成位置	第197～209図	遺構実測図（中世 溝等）
第6図	遺構実測図（古墳時代 土坑）	第210～211図	遺物実測図（弥生土器・土師器）
第7図	遺構実測図（弥生時代 竪穴建物）	第212～222図	遺物実測図（須恵器）
第8図	遺構全体図（古代下層）	第223図	遺物実測図（施釉陶器）
第9図	遺構全体図（古代中層）	第224～230図	遺物実測図（土師器）
第10・11図	遺構全体図（古代上層）	第231～241図	遺物実測図（中世土師器）
第12～27図	遺構実測図（古代下層 竪穴建物）	第242～248図	遺物実測図（珠洲）
第28図	遺構実測図（古代下層 掘立柱建物）	第249～252図	遺物実測図（中国製陶磁器）
第29図	遺構実測図（古代下層 溝）	第253・254図	遺物実測図（中近世陶磁器）
第30～34図	遺構実測図（古代中層 竪穴建物）	第255図	遺物実測図（土製品）
第35図	遺構実測図（古代中層 溝）	第256図	遺物実測図（鋳型）
第36～61図	遺構実測図（古代上層 竪穴建物）	第257～283図	遺物実測図（木製品）
第62・63図	遺構実測図（古代上層 土坑）	第284～291図	遺物実測図（石製品）
第64図	遺構実測図（古代上層 溝）	第292～296図	遺物実測図（金属製品）
第65～68図	遺構全体図（中近世）	第297図	友杉遺跡 I～IV期
		第298図	竪穴建物の規模
		第299図	墨書き土器出土分布図
		第300図	友杉遺跡 V～VII期

## 表 目 次

第1表 調査体制	2
第2表 調査一覧	3
第3表 整理体制・委託業務	4
第4表 周辺遺跡一覧	8
第5表 基本層序一覧	11
第6表 掘立柱建物（古代）一覧	233
第7表 柱穴（古代）一覧	233
第8表 竪穴建物（弥生時代・古代）一覧	234～238
第9表 土坑（古墳時代・古代）一覧	239
第10表 溝（古代）一覧	239
第11表 掘立柱建物（中世）一覧	240～246
第12表 柱穴（中世）一覧	247～263
第13表 井戸（中世）一覧	264～265
第14表 土坑等（中世）一覧	266～268
第15表 溝等（中世）一覧	269～271
第16表 土器・陶磁器・土製品一覧	369～400
第17表 木製品一覧	401～406
第18表 石製品一覧	407～408
第19表 金属製品一覧	409～410
第20表 時期別概要一覧	411
第21表 扇出土遺跡一覧	418

# 第Ⅰ章 調査経緯

## 1 調査に至る経緯

県営公害防除特別土地改良事業は、明治時代以来の神岡鉱山廃物に起因するカドミウムによって汚染された農地の土壤を復元し、大型圃場に区画整理することを目的として、昭和54年より継続している事業である。これに先立つ昭和45年に土壤汚染調査が行われた結果、当時の富山市、婦中町、大沢野町、八尾町の合わせて1,500.6haに及ぶ面積が土壤汚染対策の指定を受け、神通川上流から順に工事が進められているものである。

復元工法には上乗せ客土工法と埋め込み客土工法が採用されたが、両工法ともに地下の埋蔵文化財へ影響が及ぶ可能性があり、工事対象地において工法変更等による影響回避の調整が図れない場合には、遺跡の記録保存として発掘調査が必要とされた。工事は第1次～3次地区に分けられ、その面積と工事期間は、第1次地区90.27haが昭和54年～59年、第2次地区357haが昭和58年～平成6年で既に完了しており、残る第3次地区は当初436.9haを平成4年～16年の予定で始められたが、工事面積の増加などの変更を受け、現在は平成23年完了を目途に延長されている。友杉遺跡は第3次地区における埋蔵文化財発掘調査のひとつである。

### （1）試掘調査

第3次地区の埋蔵文化財包蔵地調査は、富山市、婦中町の教育委員会が主体となって平成7年以降実施された。富山市域では平成7～10年度および13・14年度に調査が行われ、吉倉B遺跡、任海宮田遺跡、友杉遺跡、秋ヶ島遺跡の広がりが確認された。友杉遺跡は平成13・14年度に富山市教育委員会による試掘調査が実施され、遺跡範囲が示された。

### （2）本調査

試掘調査の結果から、県耕地課、富山農地林務事務所、富山市耕地課、富山市生涯学習課、県文化課、県埋蔵文化財センターによる調整協議が実施された。これにより、遺構・遺物包含層の上に保護層として10cm上乗せした標高を設け、工事に伴う掘削がこの標高以下に及ぶ場合は、記録保存のため発掘調査を実施することとした。発掘調査は県耕地課からの委託を受け、財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所が行っているもので、平成8年度から継続的に進められてきた。友杉遺跡は平成15年度～18年度の4箇年にわたって、平面積38,182m<sup>2</sup>の発掘調査を行った。調査区割は市道島田友杉線の南をA地区、市道島田友杉線と主要地方道富山空港線の間をB地区、主要地方道富山空港線の北をC地区と設定し、それぞれ工事対象となる田地に応じて調査地区番号を付した。

## 2 発掘作業の経過

発掘調査の基準となるグリッドは、日本測地形による国家座標（平面直角座標第7系）に基づきX70470、Y2730に原点を定めた。なお、国土地理院のWeb版TKY2JGDの変換プログラムによって世界測地系へと変換した座標はX70816.7767、Y2460.4586である。南北方向をX軸、東西方向をY軸として2m方眼のグリッドを設定し、各グリッドは北東角の座標で呼称した。

調査の作業工程と内容は、文化庁による『行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての標準（報告）』（平成16年10月）に則って進めた。

## 2 発掘作業の経過

実施年度	調査事業担当				工事請負	航空測量
平成15年度	総括	所長 桃野 真晃	調査総括	調査第一課長 狩野 瞳	株式会社 荒川組	株式会社 イビソク
		主査・副所長 関 清	調査員	主任 岡本淳一郎		
		副所長・総務課長 盛田世津子		主任 中川 道子		
	総務	課長補佐 竹中 慎一		文化財保護主事 細辻 真澄		
		主任 廣田 英貴		文化財保護主事 町田 尚美		
		所長 桃野 真晃	調査総括	調査第一課長 狩野 瞳		
平成16年度	総括	主査・副所長 関 清	調査員	主任 中川 道子		
		副所長・総務課長 盛田世津子		文化財保護主事 町田 尚美		
		課長補佐 竹中 慎一		文化財保護主事 永井 三郎		
	総務	主任 廣田 英貴(~7月)		埋蔵文化財技師 杜山 貢一		
		主任 岩田 扶紀(7月~)				
		所長 桃野 真晃	調査総括	調査第一課長 神保 孝造		
平成17年度	総括	主査・副所長 関 清	調査員	主任 伊藤 潔		
		副所長・総務課長 盛田世津子		主任 中川 道子		
		課長補佐 竹中 慎一		文化財保護主事 永井 三郎		
	総務	主任 岩田 扶紀				
		所長 岸本 雅敏	調査総括	調査第一課長 神保 孝造		
		主査・副所長 山本 正敏	主任 中川 道子			
平成18年度	総括	副所長・総務課長 加藤豊次郎	調査員	文化財保護主事 永井 三郎		
		チーフ 浅地 正代				
		主任 岩田 扶紀				

第1表 調査体制



第1図 調査区割図 (1:5000)

地区	面	調査期間	延べ日数	調査面積	調査担当者	検出遺構	出土遺物
A1	中近世・古代上層	H15.5/9~6/5	16日間	470m <sup>2</sup>	中川道子・細辻真澄	竪穴建物、土坑、溝	鉄滓
	古代中層	H15.7/3~7/28	15日間	342m <sup>2</sup>		溝、土坑	須恵器、土師器
	古代下層	H15.7/29~10/10	29日間	470m <sup>2</sup>		掘立柱建物、竪穴建物、土坑、溝	須恵器、土師器、鉄滓
A2	中世	H15.5/9~7/2	33日間	2,201m <sup>2</sup>	中川道子・細辻真澄	掘立柱建物、井戸、土坑、溝、自然流路	中世土師器、珠洲、八尾、青磁、青白磁、越中瀬戸、銅錢、短刀、刀子、鐵鎌、火打金、鉄滓、砥石、土鍬
	古代上層	H15.7/3~8/29	32日間	1,376m <sup>2</sup>		竪穴建物	須恵器、土師器、黒色土器、鉄滓
	古代下層	H15.9/2~10/15	27日間	2,201m <sup>2</sup>		竪穴建物	須恵器、土師器、黒色土器、鉄滓
A3	中近世	H15.5/19~9/9	51日間	2,928m <sup>2</sup>	岡本淳一郎・町田尚美	掘立柱建物、井戸、道路、土坑、溝	中世土師器、珠洲、白磁、青磁、瀬戸美濃、馬鍬齒、鉄滓、土鍬
	古代上層	H15.9/11~10/15	20日間	1,077m <sup>2</sup>		竪穴建物、土坑	須恵器、土師器、黒色土器、鉄滓
	古代下層	H15.10/16~11/28	20日間	2,928m <sup>2</sup>		竪穴建物、土坑	須恵器、土師器、黒色土器、紡錘車、鉄滓
A4	中近世	H15.6/3~11/14	28日間	1,690m <sup>2</sup>	中川道子・細辻真澄・野口雅美	掘立柱建物、井戸、道路、土坑、溝	中世土師器、珠洲、八尾、青磁、瓦質土器、短刀、刀子、鎌、火打金、釘、鉄滓、砥石、土鍬
	古代上層	H15.11/17~12/4	12日間	1,690m <sup>2</sup>		竪穴建物	須恵器、土師器、黒色土器、製塙土器、鉄滓、砥石、硯、磨製石斧、土鍬
	古代上層	H16.5/12~6/24	29日間	1,690m <sup>2</sup>		竪穴建物	須恵器、土師器、黒色土器、製塙土器、鉄滓、砥石、硯、磨製石斧、土鍬
A5	古代中層	H15.12/8~12/24	9日間	1,690m <sup>2</sup>	中川道子・永井三郎・野口雅美	土坑	須恵器、土師器
	古代下層新	H16.6/28~8/6	28日間	689m <sup>2</sup>		掘立柱建物、土坑	須恵器、土師器
	古代下層古	H16.8/10~9/22	20日間	451m <sup>2</sup>		自然流路	須恵器、土師器
A6	中近世	H15.9/18~12/1	23日間	585m <sup>2</sup>	岡本淳一郎・町田尚美	墓坑、土坑、自然流路	中世土師器、五輪塔、銅錢
A7	中近世	H15.11/5~12/15	13日間	147m <sup>2</sup>	岡本淳一郎・町田尚美	土坑、溝	中世土師器、珠洲
A8	中近世・古代上層	H15.10/17~12/16	27日間	455m <sup>2</sup>	岡本淳一郎・町田尚美	竪穴建物、井戸、土坑、溝	中世土師器、珠洲、青磁、青白磁、越前、瀬戸美濃、瓦質土器、須恵器、土師器、鉄滓、五輪塔
A9	中近世	H15.7/15~9/30	28日間	593m <sup>2</sup>	岡本淳一郎・町田尚美	井戸、土坑、溝	伊万里、砥石、石鍋、漆椀
	古代下層	H15.10/2~12/1	17日間	593m <sup>2</sup>		竪穴建物	須恵器、土師器
	中近世	H15.7/15~10/1	26日間	1,071m <sup>2</sup>		掘立柱建物、墓坑、井戸、土坑、溝	中世土師器、珠洲、青磁、白磁、八尾、鉄滓、曲物
A10	古代中層	H15.10/2~10/23	13日間	613m <sup>2</sup>	岡本淳一郎・町田尚美	畠	須恵器、土師器、石臼、砥石
	古代下層	H15.10/24~11/26	14日間	1,071m <sup>2</sup>		竪穴建物	須恵器、土師器、弥生
	中近世	H16.7/16~8/11	18日間	927m <sup>2</sup>		掘立柱建物、井戸、土坑、溝	珠洲、八尾、青磁、砥石、硯
A11	古代中層	H16.8/19~9/6	13日間	927m <sup>2</sup>	中川道子・永井三郎	土坑	須恵器、土師器
	古代下層	H16.9/7~10/7	13日間	927m <sup>2</sup>		土坑	須恵器、土師器
	中世	H16.9/21~12/16	49日間	2,396m <sup>2</sup>		掘立柱建物、井戸、溝、土坑	中世土師器、珠洲、越前、青磁、短刀、釘、砥石、硯
B1	古代	H17.5/12~7/15	37日間	2,396m <sup>2</sup>	伊藤潔・永井三郎	竪穴建物、土坑	須恵器、土師器、打製石斧
	中世	H16.7/16~10/1	40日間	936m <sup>2</sup>		掘立柱建物、井戸、土坑、溝	中世土師器、珠洲、八尾、青磁、瀬戸美濃、茶臼、土鍬
	中世	H16.7/16~9/22	24日間	374m <sup>2</sup>		掘立柱建物、土坑、溝	中世土師器、珠洲、白磁、青磁、瀬戸美濃、馬鍬齒、鉄滓、砥石、碁石
B2	中世	H16.5/18~8/6	53日間	2,330m <sup>2</sup>	町田尚美・石川ゆづは・杜山貢一	掘立柱建物、井戸、道、土坑、溝、自然流路	中世土師器、珠洲、八尾、白磁、青磁、瓦質土器、釘、砥石、土鍬
	中世	H16.6/4~8/10	16日間	137m <sup>2</sup>		土坑、溝	珠洲、土師器
	中世	H16.6/4~8/10	31日間	916m <sup>2</sup>		掘立柱建物、土坑、溝	中世土師器、珠洲、青磁、瀬戸美濃、土師器、灰釉陶器
B3	中世	H16.6/4~7/29	20日間	532m <sup>2</sup>	町田尚美・杜山貢一	土坑、溝、自然流路	中世土師器、珠洲、瀬戸、青磁、越中瀬戸、須恵器、土師器、銅錢
	中世	H16.7/28~12/17	25日間	228m <sup>2</sup>		井戸、土坑、溝	中世土師器、珠洲、瀬戸、青磁、越中瀬戸、須恵器、五輪塔、硯
	中世	H16.7/28~10/27	33日間	849m <sup>2</sup>		掘立柱建物、井戸、土坑、溝、自然流路	中世土師器、珠洲、瀬戸、青磁、越中瀬戸、須恵器、轆羽口、銅錢、砥石、硯、板、石鍋、凹石
B4	中世	H16.9/15~12/21	30日間	523m <sup>2</sup>	中川道子	井戸、土坑、溝、自然流路	中世土師器、珠洲、瀬戸、青磁、白磁、瓦質土器、手水鉢、石臼、硯
	中世	H16.9/15~12/16	36日間	764m <sup>2</sup>		掘立柱建物、井戸、土坑、溝、自然流路	中世土師器、珠洲、瀬戸、青磁、白磁、青花、越中瀬戸、須恵器、土師器、銅錢、馬鍬齒、鉄滓、砥石、凹石、土鍬
	中世	H16.7/28~11/22	51日間	1,011m <sup>2</sup>		井戸、土坑、溝、自然流路	中世土師器、珠洲、瀬戸、青磁、白磁、瓦質土器、越中瀬戸、唐津、綠釉陶器、手水鉢、鋤先、銅錢、砥石、硯、石臼、漆椀、曲物
B5	中世	H17.5/12~6/22	22日間	608m <sup>2</sup>	中川道子	掘立柱建物、井戸、墓坑、溝	中世土師器、珠洲、青磁、白磁、轆羽口、銅錢、釘、鉄
	中世	H17.5/12~9/6	58日間	1,418m <sup>2</sup>		掘立柱建物、井戸、土坑、溝、自然流路	中世土師器、珠洲、八尾、青磁、白磁、轆羽口、銅錢、短刀、刀子、鎌、鋤先、釘、鉄滓、砥石、土鍬
	筑壙・埴・粧	H17.9/6~9/30	17日間	901m <sup>2</sup>		伊藤潔・永井三郎	須恵器、土師器、黑色土器、三彩、弥生、砥石、石核
C2	中世	H17.5/19~9/12	21日間	509m <sup>2</sup>	中川道子	掘立柱建物、井戸、墓坑、溝	中世土師器、珠洲、白磁
	古代	H17.9/13~10/27	28日間	509m <sup>2</sup>		竪穴建物、土坑	須恵器、土師器、刀子、砥石
	中世	H17.5/19~9/15	51日間	2,104m <sup>2</sup>		掘立柱建物、井戸、溝、自然流路	中世土師器、珠洲、八尾、青磁、白磁、青白磁、須恵器、土師器、釘、鉄滓、砥石、曲物、鳥形
C4	中世	H17.5/19~8/2	39日間	1,434m <sup>2</sup>	伊藤潔・中川道子・永井三郎	掘立柱建物、井戸、溝、自然流路	中世土師器、珠洲、八尾、青磁、白磁、刀子、火打金、鎌、釘、鉄
	古代	H17.8/2~10/27	35日間	831m <sup>2</sup>		竪穴建物、土坑	須恵器、土師器、綠釉陶器、灰釉陶器、製塙土器、轆羽口、砥石
C5	中世	H17.9/13~10/25	18日間	890m <sup>2</sup>	永井三郎	土坑、溝	中世土師器、須恵器、土師器
C6	中世	H18.5/15~9/26	88日間	2,829m <sup>2</sup>	中川道子・永井三郎	掘立柱建物、井戸、土坑、溝、自然流路	中世土師器、珠洲、信楽、青磁、白磁、須恵器、土師器、綠釉陶器、鑄型、鉄滓、砥石、木棺、折敷、杓子、箸、漆椀、曲物、下駄、扇、人形、鳥形、杭、柱、土鍬

第2表 調査一覧

### 3 普及活動

発掘調査の成果を広く公開し、遺跡に対する理解を深めてもらえるよう、2回の現地説明会を開催した。初回は平成15年11月15日にA4地区の中世遺構を会場にして開催した。掘立柱建物・井戸・道などの解説をはじめ、中世の遺物を中心に遺物の展示を行い、約100名の参加があった。2回目は平成16年12月5日にA11地区で中世遺構の解説を行った。現地の解説のほか、遺物および古代～近世の写真パネル展示を行い、約40名の参加を得た。

### 4 整理作業の経過

平成15年以降の各年度、出土遺物の洗浄・注記については、現場において現場整理作業員が行った。また、発掘調査を終えた冬期間に各担当調査員によって、本格整理に備えての図面および遺物の基礎的な分類・整理を行い、木製品・石製品・金属製品については整理台帳を作成した。なお、調査概要是『埋蔵文化財概要』(平成15・16年度)、『埋蔵文化財年報』(平成17・18年度)で公表している。平成16年度には、前年度出土した布片について、その稀少性、脆弱性を考慮し、本格整理に先行して成分分析および保存処理を実施している。

報告書刊行に向けての本格的な整理作業は平成19年度から開始した。19年度は土器、陶磁器の接合、実測、遺構図編纂のほか、木製品、金属製品、石製品の写真撮影および実測、各種自然科学分析を行った。20年度は土器、陶磁器の復元および写真撮影のほか、自然科学分析、木製品と金属製品の保存処理、挿図作成およびトレース、遺物・遺構一覧表の作成を行った。21年度は図版作成、原稿執筆、編集、校正、印刷を行った。

遺物の実測は、土器、陶磁器、土製品を調査員および室内作業員で行った。木製品、金属製品、石製品については一部を除き専門機関に委託した。実測図は種類別に遺物カードを作成し、遺構実測図・写真とともにデータベース化した。このデータ整理について平成19・20年には人材派遣会社へ委託し、整理作業員で補足した。写真撮影は専門機関へ委託し、19年度は銀塩フィルム、20年度はデジタルカメラで撮影し、各々4×5判フィルム、デジタルデータで納入された。自然科学分析では木製品の樹種同定、放射性炭素年代測定、漆塗膜分析、金属製品の科学的分析、土器の胎土分析をそれぞれの専門機関に委託し、成果を活用した。また劣化が懸念される遺物については保存処理を行った。金属製品については樹脂、木製品は糖アルコールによる含浸処理をそれぞれ施している。

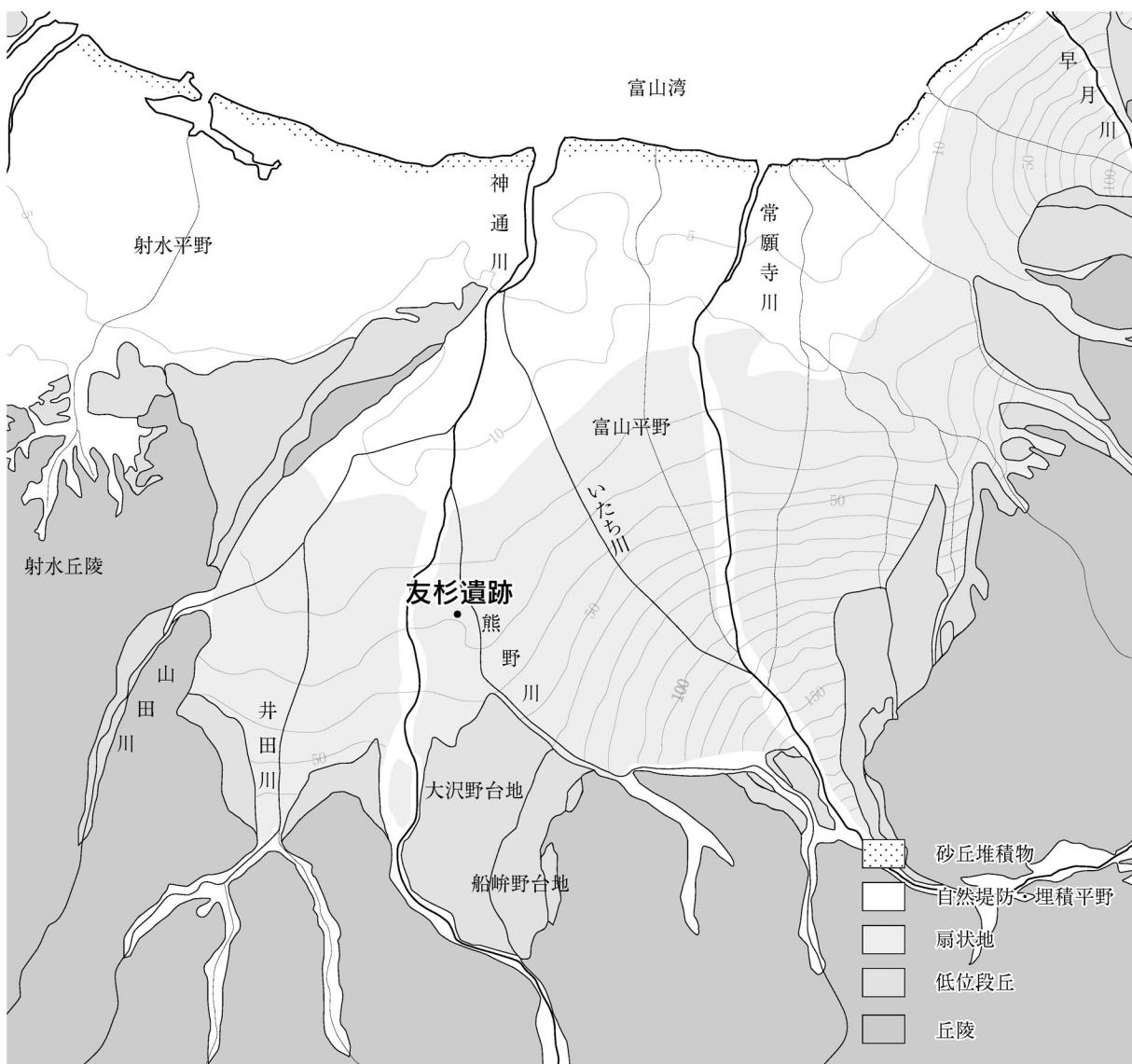
実施年度	整理業務担当				委託業務					
	写真撮影	遺物実測	保存処理	分析	データ入力					
平成16年度						財団法人元興寺文化財研究所				
平成19年度	総括	所長 岸本 雅敏	整理総括	調査第二課長 河西 健二	写房 楠華堂	財団法人大阪市文化財協会 ・株式会社アーキジオ	-	株式会社古環境研究所・ 漆器文化財研究所・株式会社加速器分析研究所・JFEテクノリサーチ株式会社	株式会社プライムビジネススタッフ	
		主査・副所長 山本 正敏	担当	主任 青山 晃						
		副所長・総務課長 加藤豊次郎		文化財保護主事 町田 尚美						
	総務	チーフ 浅地 正代								
		主任 岩田 扶紀								
平成20年度	総括	所長 岸本 雅敏	整理総括	調査第二課長 河西 健二	アーガス・フォトスタジオ	財団法人大阪市文化財協会 ・株式会社芸匠	-	胎土分析研究会	株式会社プライムビジネススタッフ	
		主査・副所長 山本 正敏	担当	主任 中川 道子						
		副所長・総務課長 加藤豊次郎		主任 町田 尚美						
	総務	チーフ 浅地 正代								
		主任 岩田 扶紀								
平成21年度	総括	所長 岸本 雅敏	整理総括	調査第二課長 河西 健二						
		副所長 池野 正男		チーフ 中川 道子						
	総務	課長 竹中 慎一	担当	主任 町田 尚美						
		チーフ 浅地 正代								

第3表 整理体制・委託業務

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 1 地理的環境

富山県の中央部に開けた富山平野は、神通川・常願寺川等によって形成された複合扇状地である。神通川は飛騨高原に発して総延長120kmを誇り、井田川・山田川とともに扇状地を形成して、婦負郡成立の土壤となる。扇頂部右岸には河岸段丘が発達して、船崎野台地・大沢野台地が形成され、旧石器～縄文時代の遺跡が分布する。常願寺川は立山連峰から発し、同じく立山連峰内に発する称名川とともに豊富な雪解け水を集めて富山湾へと下る。その傾斜は厳しく、日本有数の急流として知られる。急流ゆえ暴れ川でもあり、幾度となく流路を換え、いたち川は旧河道の一つと考えられる。また水源地では立山火山によって約10万年前まで活発な火山活動が行われ、常願寺川によって運ばれる大量の流出物が現在に至るまで大規模な治水事業を必要とさせている。神通、常願寺両河川によって厚い礫層が堆積し、形成された扇状地は標高15m（現在の海岸線から6～10km）付近まで広がる。そこから先は海岸線まで自然堤防帶・埋積平野が形成される。神通川と常願寺川によって挟まれた一帯には熊野川・いたち川等の中小河川が分流し、太田保を始めとする莊園形成を可能とさせた。



第2図 遺跡周辺の地形

## 2 歴史的環境

旧石器時代の遺跡は船崎野・大沢野台地、常願寺川左岸段丘、熊野川左岸丘陵上に確認されている。続く縄文時代の遺跡は船崎野・大沢野台地、熊野川左岸丘陵から熊野川中流域にかけて広がりをみせるが、弥生時代には熊野川下流域に黒瀬大屋遺跡が形成されるのみで分布密度は希薄である。

古墳時代には大沢野台地北端に伊豆宮古墳・福居古墳が築かれる。伊豆宮古墳は15×23mの方形墳もしくは八角形墳で、川原石積の横穴式石室から鉄器片が出土している。福居古墳は墳丘について不詳であるが、伝出土の須恵器台付壺がある。両墳ともに古墳時代後期に比定される。また同時代の散布地は熊野川・いたち川流域で少数確認されている。

古代における富山平野は西部が婦負郡に、東部が新川郡に比定される。その境界には神通川、もしくは熊野川が当てられたと推定され、友杉遺跡を含む一帯は婦負郡に含まれる可能性が高い。神通川右岸の遺跡としては任海宮田遺跡、任海鎌倉遺跡、吉倉A・B遺跡、南中田A～D遺跡、栗原楮原遺跡等が、神通川左岸には中名I・II・V・VI遺跡、友坂遺跡、持田I遺跡といった集落遺跡が存在する。任海宮田遺跡では廂付建物が確認され、墨書き土器が多数出土、奈良三彩火舎や鉄鉢型土師器の出土から仏教的活動がうかがえるなど、8世紀後半から10世紀代まで一帯の中核的集落として機能したことが推定される。

一方熊野川右岸ではいたち川中流域まで散布地が広がり、後に太田保を形成する開発が進んでいったことが推定される。この地域での調査事例は少ないが、富山市辰尾で住宅地造成に際して土師器が出土している。

中世における当地域は徳大寺家領宮河荘域に比定される。徳大寺家は藤原閑院流の出で、大治元年(1126)に徳大寺公能が越中国守に任せられたことを機に私領を形成したと考えられている。天文2年(1533)「徳大寺家当知行之目録」によれば、全国に散在する同家領の中でもその筆頭に「越中国般若野庄領家方 同国宮河庄」とあり、越中国内に大規模な荘園を領有したことが認められる。般若野荘は現在の砺波市から高岡市にかけての庄川流域に比定され、その初見は文治2年(1186)である。宮河荘の成立についてははっきりしないが、同様に古代末期に成立したものと考えられる。その初見は文和3年(1354)、室町2代將軍足利義詮「御判御教書案」で、宮河荘における守護不入権が確認されている。同教書は鵜坂神社の訴えに対して出されたもので、鵜坂神社が宮河荘の荘官的役割を果たしていたことも推測できる。鵜坂神社は神通川左岸に鎮座する式内社で、建久頃(1190～99)には鵜坂御厨を形成している。宮河荘の荘域を近世宮河郷から推定すると、神通川右岸は熊野川との間、合流地点付近から大沢野段丘下の塙付近まで、左岸は井田川との間、合流地点付近から添島付近までと推定できる。推定荘域内に存在する遺跡は、神通川右岸では任海宮田遺跡、任海鎌倉遺跡、吉倉A・B遺跡、南中田A～D遺跡、栗原楮原遺跡等が、神通川左岸では道場I・II遺跡、中名I・II・V・VI遺跡、友坂遺跡、清水島II遺跡、持田I遺跡といった集落遺跡が確認されている。任海宮田遺跡は古代末期の断絶期間を挟んで13世紀から14世紀を中心に集落が形成される。任海地内には任海池原寺跡があり、隣接する地区から青銅製燭台や瀬戸美濃・瓦質土器の香炉・花瓶が出土している。

一方熊野川右岸ではいたち川右岸まで開発が進む。この地域は太田保に比定され、古代末期の越中国守宮道氏に出自をもつ太田氏が拠点とした。また蟻川最勝寺の所在する蟻川館跡は、太田氏一族の蟻川氏の館跡である。南北朝期には観応の擾乱に際して、足利直義方の有力な武将として活躍した桃井直常が布市近辺に拠点を置いた。直常開基とされる興國寺には直常の墓と称する宝篋印塔があつて明治30年に石棺内から古鏡・石仏・墓証が発見されている。太田保は富山平野の中心・交通の要所で

あり、戦国期には上杉方、織田方それぞれが掌握に努めている。

友松に関する記述もみられる。「親鸞聖人遺徳法輪集」によれば、極性寺が15世紀頃友松にあったことがわかる。また天正6年（1578）に神保長住が上熊野の二宮左衛門大夫にあてた知行安堵状に「友松之内、館分并円光寺之事」とあり、戦国期に友松に館が存在したこと、円光寺という寺院が存在したことがわかる。

近世は初め加賀藩に属し、万治2年（1660）の領地替えで富山藩領新川郡宮河郷に属す。かつて熊野川左岸であった島田集落は、元和元年（1615）の大洪水で右岸の現在地になったという。熊野川支流荒川はかつて船の往来があり、現在の産業展示館付近で荷揚げが行われた。また享保頃には覚証寺という寺院が存在したとされる。



第3図 遺跡分布図（1:25000）

## 2 歴史的環境

番号	遺跡名	所在地	種類	時代
1	友杉遺跡	富山市友杉	集落	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)
2	任海宮田遺跡	富山市任海字宮田割 他	集落	繩文(晚)・古墳・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
3	任海遺跡	富山市任海	散布地	繩文(晚)・古墳・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
4	吉倉B遺跡	富山市吉倉字柿ノ木又割 他	集落	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)
5	吉倉A遺跡	富山市吉倉字小屋作割	散布地・墓	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)
6	南中田A～D遺跡	富山市南中田	集落	繩文・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)
7	栗山楮原遺跡	富山市栗山字楮原割	集落	古代(平安)・中世(鎌倉・室町)
8	惣在寺廃寺跡	富山市惣在寺字下寺田割 他	寺院	中世(鎌倉・室町)・近世
9	栗山A遺跡	富山市惣在寺字下寺田割 他	集落	繩文(晚)・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)
10	伊豆宮II遺跡	富山市上栗山字野田割	集落	繩文(中)
11	伊豆宮古墳	富山市下大久保(大沢野町)	古墳	古墳時代後期
12	大利屋敷遺跡	富山市大利字大利割 他	散布地・墓	繩文(晚)・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)
13	大利遺跡	富山市大利字大利割 他	散布地	古代(平安)
14	福居古墳	富山市下大久保(大沢野町)	古墳	古墳時代後期
15	下野A遺跡	富山市塙字下野割(大沢野町)	散布地	中世(鎌倉・室町)
16	内A・B遺跡	富山市塙字内割(大沢野町)	散布地	中世(鎌倉・室町)
17	塙遺跡	富山市塙字内割(大沢野町)	散布地	繩文
18	黒瀬大屋遺跡	富山市黒瀬字大屋割 他	散布地	弥生(後)・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
19	黒崎種田遺跡	富山市黒崎字種田割 他	散布地	古代(平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
20	八日町遺跡	富山市八日町	散布地	古代(平安)・中世(鎌倉・室町)
21	蟾川館跡	富山市蟾川	城館	中世(鎌倉・室町)・近世
22	安養寺遺跡	富山市安養寺字寺後割	集落	中世(鎌倉・室町)・近世
23	下熊野遺跡	富山市下熊野字庄平割 他	散布地	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
24	宮保遺跡	富山市宮保字三日月田割 他	散布地	繩文・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)
25	辰尾遺跡	富山市辰尾字沼 他	散布地	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
26	上熊野遺跡・上熊野城跡	富山市上熊野 他	散布地・城館	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)
27	上野井田遺跡	富山市上野 他	集落	古代(奈良・平安)・近世
28	二股北遺跡	富山市二俣	散布地	繩文(中・後)・古代(奈良・平安)
29	石田北遺跡	富山市石田	散布地	繩文(後・晚)・古代(奈良)・中世(鎌倉・室町)
30	石田打宮遺跡	富山市石田字打宮	散布地	中世(鎌倉・室町)
31	上野龜田遺跡	富山市上野	散布地	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)
32	石田遺跡	富山市石田字小倉割 他	散布地	繩文(後・晚)・古代(奈良)・中世(鎌倉・室町)
33	悪王寺遺跡	富山市悪王寺字水尻割	集落	繩文・古代(奈良)・中世(鎌倉・室町)
34	若竹町遺跡	富山市若竹町 他	散布地	古墳・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)
35	吉岡遺跡	富山市吉岡字野田割 他	散布地	繩文(晚)・古代(奈良)・中世(鎌倉・室町)・近世
36	経力遺跡	富山市経力	散布地	繩文・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
37	興国寺館跡	富山市布市 他	城館	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)
38	布市遺跡	富山市布市 他	散布地・城館	繩文(後)・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)
39	上栄遺跡	富山市上栄	散布地	中世(鎌倉・室町)・近世
40	布市北遺跡	富山市布市 他	散布地	古代(奈良)・中世(鎌倉・室町)・近世
41	閔遺跡	富山市閔 他	散布地	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
42	龍高寺遺跡	富山市月岡	散布地	中世(室町)
43	開発覚田遺跡	富山市開発字覚田	散布地	繩文(晚)・古代(平安)・中世(鎌倉・室町)
44	壇ノ山遺跡	富山市月岡字壇ノ山	散布地	繩文(後・晚)
45	月岡町三丁目遺跡	富山市月岡町三丁目	散布地	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)
46	江本遺跡	富山市江本 他	散布地	繩文(晚)・古代(平安)
47	中布目遺跡	富山市中布目	散布地	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)
48	中布目大安寺跡	富山市中布目	寺院	中世(室町)
49	大井遺跡	富山市大井 他	散布地	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)
50	上布目遺跡	富山市上布目字五月田割 他	散布地	繩文・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
51	西番南割遺跡	富山市西番南割	散布地	中世(鎌倉・室町)
52	八川・城村遺跡	富山市八川 他	散布地	中世(鎌倉・室町)
53	新名遺跡	富山市新名 他	散布地	中世(鎌倉・室町)
54	本郷町遺跡	富山市本郷町 他	散布地	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
55	上新保遺跡	富山市上新保字三俵田割 他	集落	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
56	本郷水上遺跡	富山市本郷町字水上割	散布地	中世(鎌倉・室町)
57	太田南町遺跡	富山市太田南町字江添割庚申塚割	散布地	古代(奈良・平安)
58	大宮町遺跡	富山市大宮町字宮田割 他	散布地	古代(平安)・中世(鎌倉・室町)
59	太田本郷城跡	富山市太田南町	城館	古墳(前)・中世(鎌倉・室町)
60	太田中田I・II遺跡	富山市太田中田割	散布地	古代(平安)・中世(鎌倉・室町)
61	太田惣見遺跡	富山市太田惣見割	散布地	中世(鎌倉・室町)
62	本郷椎木遺跡	富山市本郷椎木割	散布地	古代(平安)
63	今泉城跡	富山市今泉	城館	中世(鎌倉・室町)
64	中久保遺跡	富山市中久保掛坂割(大沢野町)	散布地	繩文
65	馬鞍谷遺跡	富山市坂本2区(大沢野町)	散布地	古代(平安)
66	小黒遺跡	富山市小黒(大沢野町)	散布地	繩文
67	松林遺跡	富山市松林廻江下割(大沢野町)	散布地	繩文
68	万願寺遺跡	富山市万願寺(大沢野町)	散布地	繩文
69	中央農高A・B遺跡	富山市東福沢(大山町)	散布地	A : 弥生(後) B : 弥生(中)
70	一ノ瀬遺跡	富山市一ノ瀬(大山町)	散布地	繩文(草・前)・古代(平安)
71	徳林寺裏遺跡	富山市東福沢瀬戸谷割(大山町)	散布地	旧石器・繩文(中)・古代(奈良・平安)
72	津毛城跡	富山市東福沢(大山町)	城館	中世(室町)
73	東福沢遺跡	富山市東黒牧(大山町)	散布地	旧石器・繩文(草創期・前・中)・古代(平安)

第4表 周辺遺跡一覧

# 第Ⅲ章 遺跡の調査

## 1 調査の方法

調査区割については第Ⅰ章（2）に詳しいが、道路を境界として大きくA～Cの3地区に分けた。復元工事の計画に則してA地区はA 1～11、B地区はB 1～13、C地区はC 2～6に区割りし、合計29地区の調査となった。なお、C 1地区については調査区設定後、工事範囲及び工法の変更により、調査不要となつたため欠番とした。

対象地の現況は水田および畠地であった。表土（耕作土）は重機によって掘削した。包含層および遺構発掘では、一部に礫層まで遺構の広がりがみられた。人力で礫を除去しながら掘削する作業には多大な時間と労力を要した。

調査の結果、全ての調査区において中世～近世の遺構を検出した。掘立柱建物は重複が激しく、柱穴の判別が困難であったが、出来る限り現地での検討に努めた。下層で遺構を確認した地区は、A 1～4、A 8～11地区とB 12～13地区、C 2～4地区で古代、B 13地区北側で弥生・古墳時代を検出した。特にA 4地区周辺の古代遺構は濃密であった。竪穴建物が幾重にも重複していたが、上部を削平されていたため非常に浅く、カマド痕跡や硬化面などを手がかりに検出したものが多い。

## 2 層序

調査区は東西590m、南北650mの範囲内に広がり、南北の標高差は最大で約3mを測る。この範囲内には谷地形や自然流路等の小河川が含まれると考えられる。現在でもB 1・B 2地区は荒川の対岸に位置しており、その他の調査区とはやや状況が異なっている。このように堆積が安定的ではないため、あらかじめ設定した基本層序を柱として、隣接する調査区との連続性を重視しながら適宜分層を行った。基本層序は第4図のとおりである。上から順にⅠ～Ⅲ層、地山と大きく分け、それぞれの土色、土質によってさらに細分した。

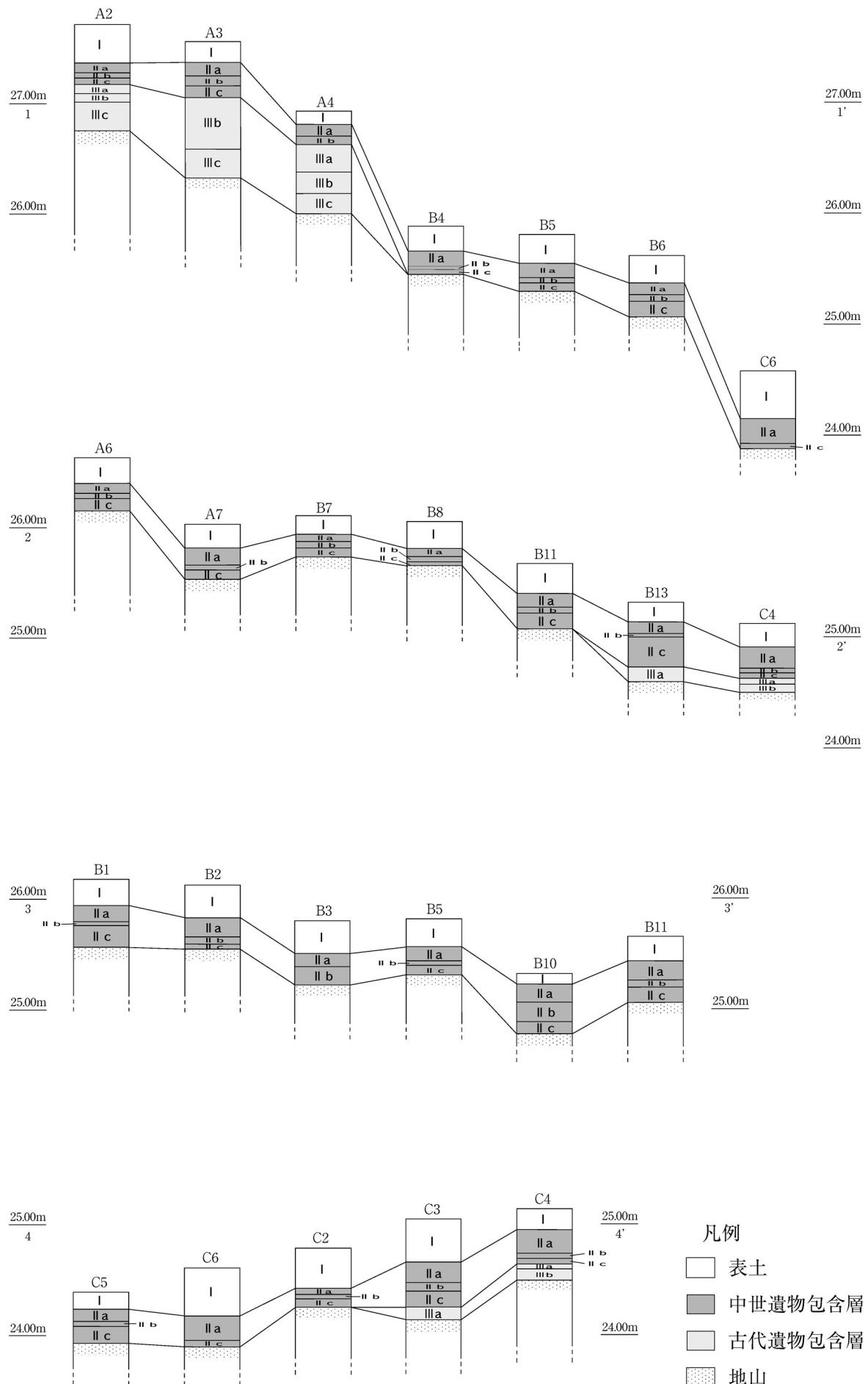
Ⅰ層は水田耕作土および耕盤土であり、重機によって掘削を行った。出土遺物は中世～近世、近代の土器・陶磁器類が少量散見する程度で、量的には少ない。

Ⅱ層は中世の遺物包含層である。Ⅱa～Ⅱc層の3層に細分でき、Ⅱc層直下が中世の遺構検出面となる。後述する下層の堆積が不安定であるせいか、中世の包含層であるⅡ層包含層には、古代の遺物も相当量混入している。Ⅱ層は広範囲にわたって比較的安定した堆積状況を示しており、連続性が明瞭であった。

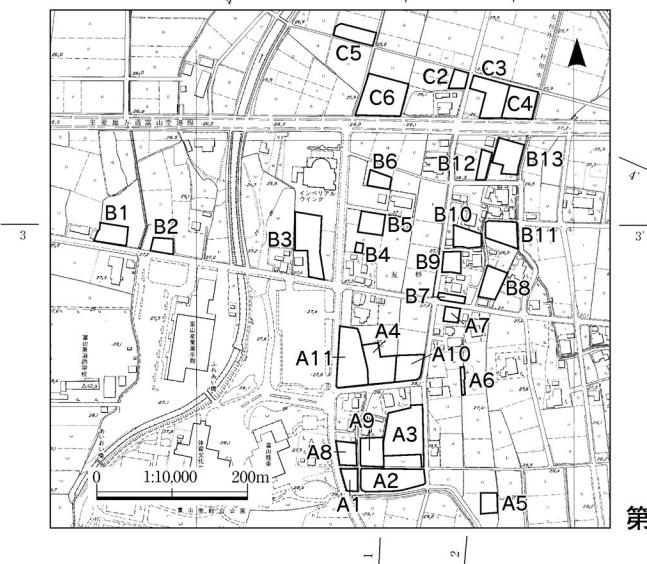
Ⅲ層は古代の遺物包含層であるが、調査では飛び地のごとく部分的な確認となった。Ⅲ層の堆積状況が良好な部分では、さらにⅢa～Ⅲc層に区分し、Ⅲa層を古代上層、Ⅲb層を古代中層、Ⅲc層を古代下層とした。遺物の包含状況は、層自体それほど厚みがないせいもあり、古代の遺物が新旧混在して出土するものが大勢である。

地山は砂層あるいは砂礫層となる。B 1地区やB 8・B 11地区周辺では礫層が隆起しており、礫原に遺構が築かれている場所もみられる。

## 2 層序



第4図 基本層序模式図



第5図 模式図作成位置 (1:10000)

	I層		II層			III層			地山
	I a層	I b層	II a層	II b層	II c層	III a層	III b層	III c層	
A1	2.5Y4/2暗灰黄色 シルト	-	2.5Y5/1暗灰黄色 シルト	2.5Y5/4黄褐色 シルト	-	2.5Y5/3黄褐色 シルト	2.5Y6/3にぶい黄色 砂質シルト	2.5Y5/2暗灰黄色 砂質シルト	色なし
A2	2.5Y3/1黒褐色 シルト	2.5Y5/3黄褐色 シルト	2.5Y4/1黄灰色 シルト	2.5Y5/4黄褐色 シルト	2.5Y4/1黄灰色 シルト	2.5Y5/1黄灰色 シルト	2.5Y5/3黄褐色 砂質シルト	2.5Y6/1黄灰色 砂質土	色なし
A3	2.5Y3/3暗オーリーブ 褐色ローム	2.5Y4/6オーリーブ 褐色砂質ローム	2.5Y4/2暗灰黄色 砂質ローム	10YR4/4褐色 砂質ローム	2.5Y3/3暗オーリーブ 褐色砂質ローム	-	10YR4/4褐色砂 ローム	10YR4/3にぶい 黄褐色砂	2.5Y4/4オーリーブ 褐色粗砂
A4	2.5Y4/3オーリーブ 褐色シルト	-	2.5Y4/1黄灰色 シルト	2.5Y6/4にぶい黄色 シルト	-	2.5Y5/1黄灰色 シルト	2.5Y6/2黄灰色 シルト	2.5Y4/1黄灰色 シルト	2.5Y6/2暗黄色 砂質土
A5	2.5Y3/3暗オーリーブ 褐色砂質ローム	10YR5/6黄褐色 砂質ローム	10YR4/2暗黄褐色 砂質ローム	10YR4/6褐色 砂質ローム	10YR2/3黒褐色砂、 砂礫	-	-	-	10YR4/6褐色砂
A6	10YR3/2黒褐色 砂質ローム	10YR5/6黄褐色 砂質ローム	10YR4/2暗黄褐色 砂質ローム	10YR4/4褐色 砂質ローム	10YR3/3暗褐色 砂質ローム	-	-	-	10YR6/3黄褐色 粗砂
A7	10YR3/3暗褐色 砂質ローム	10YR5/6黄褐色 砂質ローム	10YR4/3にぶい 黄褐色砂質ローム	10YR4/6褐色 砂質ローム	10YR3/3暗褐色 砂質ローム	-	-	-	10YR4/4褐色粗砂、 礫
A8	10YR3/2黒褐色 砂質ローム	-	10YR4/3にぶい 黄褐色砂質ローム	-	-	-	2.5Y4/4褐色砂	10YR3/4暗褐色砂	2.5Y5/3黄褐色 粗砂、礫
A9	2.5Y3/1黒褐色 砂質ローム	10YR4/4褐色 砂質ローム	10YR3/3暗褐色 砂質ローム	10YR4/4褐色 砂質ローム	10YR3/3暗褐色 砂質ローム	-	10YR4/4褐色砂	10YR4/3にぶい 黄褐色砂	2.5Y4/4オーリーブ 褐色粗砂
A10	2.5Y4/6オーリーブ 褐色シルト	10YR6/6明褐色 シルト	2.5Y5/2暗灰黄色 砂質シルト	-	2.5Y4/2暗灰黄色 砂質シルト	-	2.5Y6/3にぶい 黄色砂質土	2.5Y3/3暗オーリーブ 褐色砂質土	2.5Y6/4にぶい黄色 砂質土、礫
A11	2.5Y4/2暗灰黄色 砂質土、やや粘質 シルト	10YR5/6黄褐色 砂質土	10YR4/2暗黄褐色 砂質土	-	10YR3/2黒褐色 砂質土	10YR3/3暗褐色 砂質土	-	10YR3/3暗褐色 砂質土	色なし
B1	2.5Y3/2黒褐色 砂質ローム	10YR5/6黄褐色 砂質ローム	2.5Y4/3オーリーブ 褐色砂質ローム	10YR5/6黄褐色 砂質ローム	10YR3/4暗褐色 砂質ローム	-	-	-	色なし
B2	2.5Y3/2黒褐色 砂質ローム	10YR5/6黄褐色 砂質ローム	2.5Y4/3オーリーブ 褐色砂質ローム	10YR5/6黄褐色 砂質ローム	10YR3/4暗褐色 砂質ローム	-	-	-	色なし
B3	2.5Y4/2暗灰黄色 砂質ローム	2.5Y5/4黄褐色 砂質ローム	2.5Y4/2暗灰黄色 砂質ローム	2.5Y4/3オーリーブ 褐色砂質ローム	-	-	-	-	色なし
B4	2.5Y5/1黄灰色 シルト	10YR5/6黄褐色 砂質シルト	2.5Y5/2暗灰黄色 砂質シルト	10YR4/2暗黄褐色 砂質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色 砂質シルト～ 2.5Y3/2黒褐色 砂質シルト	-	-	-	2.5Y5/5黄褐色 砂質土
B5	2.5Y5/1黄灰色 シルト	10YR5/6黄褐色 砂質シルト	2.5Y5/2暗灰黄色 砂質シルト	10YR4/2暗黄褐色 砂質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色 砂質シルト～ 2.5Y3/2黒褐色 砂質シルト	-	-	-	2.5Y5/3黄褐色 砂質土
B6	2.5Y4/2暗灰黄色 砂質ローム	2.5Y5/4黄褐色 砂質ローム	2.5Y5/2暗灰黄色 砂質ローム	2.5Y5/6黄褐色 砂質ローム	10YR4/4褐色 砂質ローム	-	-	-	2.5Y5/6黄褐色砂
B7	2.5Y3/2黒褐色 砂質土	10YR5/6黄褐色 砂質土	2.5Y4/2暗灰黄色 砂質土	10YR5/8黄褐色 砂質土	10YR3/4暗褐色 砂質土	-	-	-	色なし
B8	2.5Y3/2黒褐色 砂質土	10YR5/6黄褐色 砂質土	2.5Y4/2暗灰黄色 砂質土	10YR5/8黄褐色 砂質土	10YR3/4暗褐色 砂質土	-	-	-	色なし
B9	2.5Y3/2黒褐色 砂質土	7.5YR明褐色 砂質土	2.5Y5/2暗灰黄色 砂質土	10YR4/4褐色 砂質土	2.5Y4/1黄灰色 砂質シルト	-	-	-	2.5Y4/2暗灰黄色 粗砂、礫
B10	2.5Y4/3オーリーブ 褐色砂質ローム	10YR4/3にぶい 黄褐色砂質ローム	2.5Y4/4オーリーブ 褐色砂質ローム	10YR4/4褐色 砂質ローム	色なし	-	-	-	色なし
B11	色なし	色なし	色なし	色なし	10YR2/2黒褐色 砂質シルト	-	-	-	色なし
B12	2.5Y4/1黄灰色 粘質シルト	10YR5/6黄褐色 砂質シルト	2.5Y4/2暗灰黄色 砂質シルト	10YR5/6黄褐色 砂質シルト	2.5Y4/1黄灰色 砂質シルト	-	-	-	2.5Y6/3にぶい 黄色砂質土、 2.5Y5/2暗灰黄色 砂礫
B13	色なし	色なし	2.5Y4/2暗灰黄色 砂質土	10YR5/6黄褐色 砂質土	10YR3/2黒褐色 砂質土	10YR3/3暗褐色 砂質土	-	-	2.5Y5/3黄褐色 砂質土、 2.5Y5/3黄褐色砂 礫
C2	10YR4/1褐灰色 シルト	2.5Y5/4黄褐色 砂質シルト	2.5Y5/2暗褐色 砂質シルト	10YR4/2暗黄褐色 砂質シルト	10YR3/2黒褐色 砂質シルト	-	-	-	2.5Y6/4にぶい 黄色砂質土
C3	色なし	色なし	10YR5/3にぶい 黄褐色砂質土	7.5Y5/6明褐色 砂質土	10YR4/3にぶい 黄褐色砂質土	10YR3/2黒褐色 砂質土	-	-	2.5Y6/3にぶい 黄色砂質土
C4	色なし	色なし	10YR6/3にぶい 黄橙色砂質土	7.5YR5/6明褐色 砂質土	10YR4/3にぶい 黄褐色砂質土	10YR3/2黒褐色 砂質土	2.5Y5/3黄褐色 砂質土	-	2.5Y6/4にぶい 黄色砂質土
C5	2.5Y3/2黒褐色 砂質土	-	2.5Y4/2暗灰黄色 砂質土	2.5Y3/3暗オーリーブ 褐色砂質	10YR3/2黒褐色 砂質土	-	-	-	色なし
C6	10YR4/2暗褐色 砂質土	10YR4/3にぶい 黄褐色砂質土	2.5Y4/2暗灰黄色 砂質土	-	5Y3/1黑色砂質土、 水分多く含み 柔らかい	-	-	-	2.5Y6/2灰色砂質土

第5表 基本層序一覧

### 3 遺構

検出した遺構総数は8572基で、時期は弥生時代～近代であるが、主体は古代と中世である。各地区の検出面については第2表のとおりである。

古代は遺構埋土によって上層、中層、下層の3面に分けて調査を行い、竪穴建物132棟、掘立柱建物2棟などを検出した。ただし、古代全時期を通して層には厚みがなく、遺構上部を欠いた状態のものがほとんどである。特に竪穴建物は壁の残存状況が良くない状態であったため、検出には比較的残りの良いカマドや、焼土、炭化物の集中地点などを手がかりにした。A1、A2、A4地区の遺構密集部分では、サブトレーンチや土層確認用畦の設定、散水後の乾燥具合を観察するなど、様々な方法で精査を重ね検出した。

中世は單一面の調査であるが、近世、近代の遺構が一部含まれる。掘立柱建物122棟、井戸90基、墓坑4基のほか、竪穴状土坑、道など中世前半の集落を中心に検出した。建物方位や出土土器などから集落の変遷がうかがえ、概ねC地区、A地区、B地区の順に場所を移していくようである。なかには掘立柱建物が道や溝によって区画されたものもある。また、建物が集中する部分では建替えを含めた遺構の重複が著しく、足の踏み場もない状態であった。

一方、井戸についてはその分布が偏在してみられることから、地下水脈との関連性が強いと考えられる。素掘り井戸のほか井戸側材には木、石が用いられ、水溜施設として底に曲物が据えられている例が多数を占める。木側の構造は縦板組横桟留が多く、転用材がしばしば見受けられる。石側では人頭大ほどもある河原石を積み上げ、深いものでは2m近い立派な石組もある。

以下、主要な遺構について記述するが、個々については観察表の記載に代えたい。

#### (1) 弥生時代

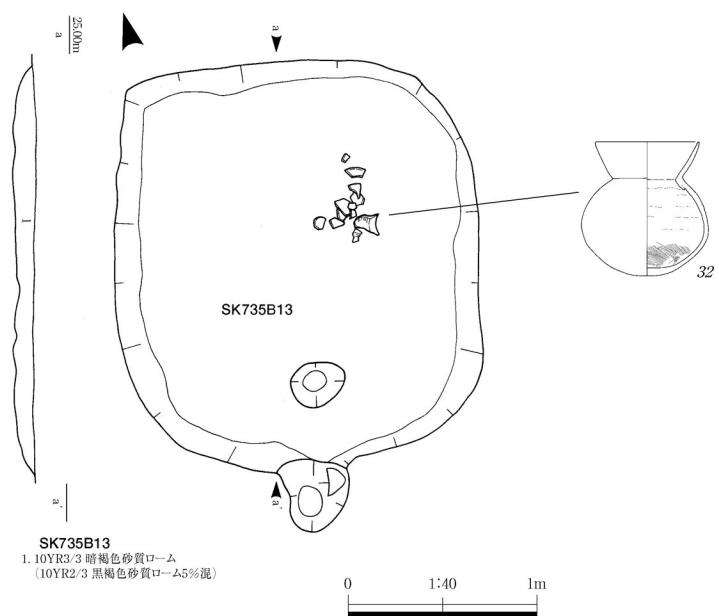
##### A 竪穴建物

801B13号（S I 801B13、第7・10・43図、図版3）B13地区北端のⅢ層下で検出。遺構埋土の色は黒味が強く、古代遺構の埋土とは明らかに異なる。調査区端のため建物の半分程度のみ確認。壁の立ち上がりが良好に残り、床面には完形の土器27点が潰れた状態で出土した。時期は出土土器から弥生時代終末期とみられる。方形プランで柱穴や炉等は不明である。

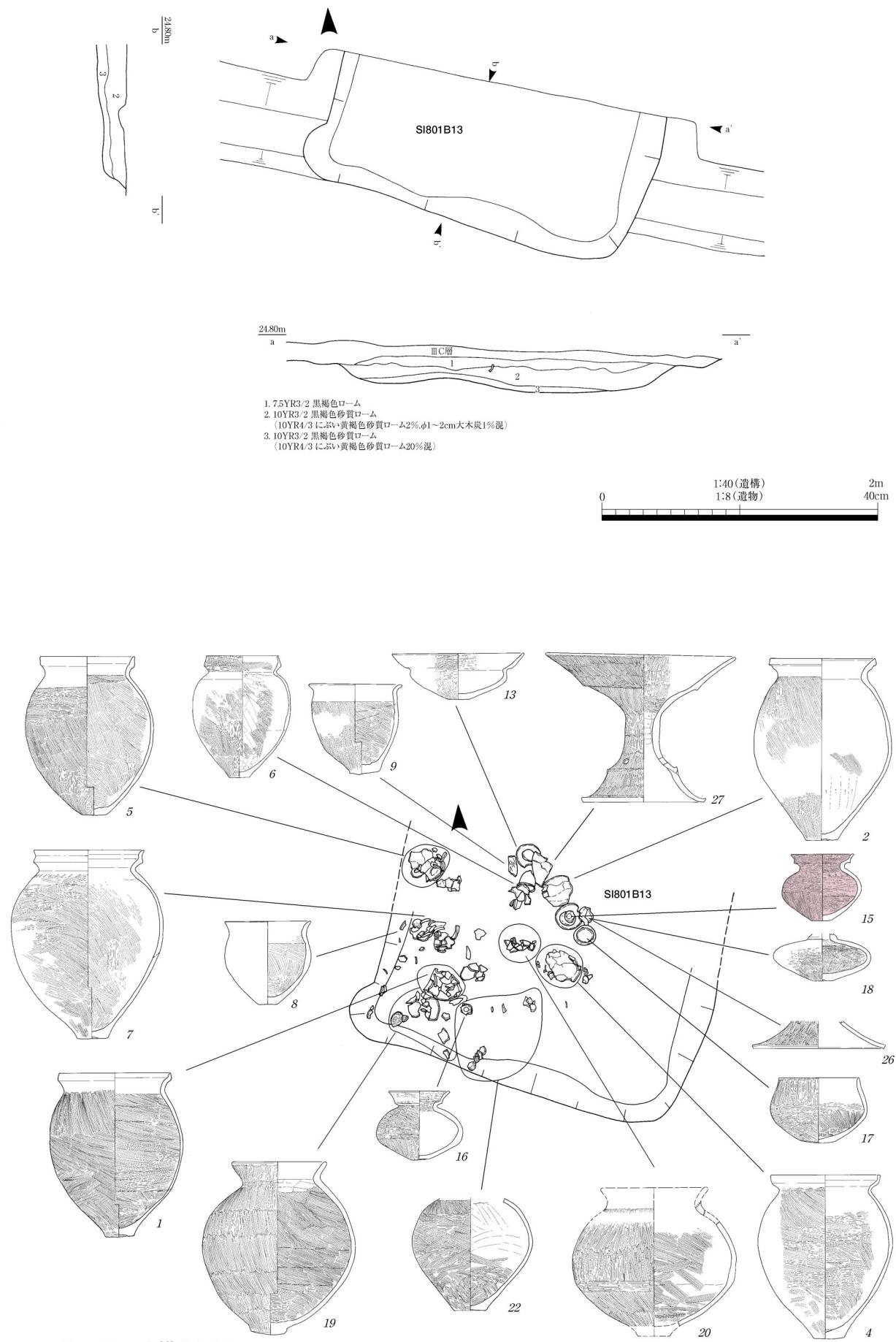
#### (2) 古墳時代

##### A 土坑

735B13号（S K 735B13、第6・10・43図、図版3）B13地区北寄りで検出。床面から土師器壺が潰れた状態で出土した。遺構埋土および出土土器から古墳時代前期（高畠式）とみられる。方形プランで、南辺中心に小さな土坑をもつことから、これをカマドとする竪穴建物の可能性も考えられる。



第6図 遺構実測図  
SK735B13



第7図 遺構実測図  
SI801B13

### (3) 古代

古代では掘立柱建物2棟、竪穴建物132棟（可能性あるものを含めると138棟）、その他溝や土坑を検出した。竪穴建物については、限られた場所で重複を繰り返していたため、その変遷を明確には把握し難い状況であった。以下、下層から順に記述する。

#### 下層（全体図：第8図）

A 1～A 4、A 8、A 9、A 11地区で遺構を検出した。特にA 1、A 2地区で竪穴建物が集中する。

##### A 掘立柱建物

1号（SB 1、第12・28図、図版5）A 1地区に位置。3間×2間の側柱構造をとり、柱穴規模が比較的大きく、柱痕も明瞭である。他の遺構との重複が著しく、上層や中層の調査段階で重複している竪穴建物等と同時に掘り下げたものもあるが、断面観察から古代最下層とされる。

2号（SB 2、第27・28図、図版5）A 4地区中央、自然流路の底部で検出。3間×2間の側柱構造で、SB 1と構造が似る。建物方位は約90度異なり、やや小ぶりな印象だが、遺構上部は上層遺構によって削平されていることから、本来はSB 1と同規模であった可能性もある。

##### B 竪穴建物

301A 3号（SI 301A 3、第13図）A 3地区北。南壁にカマドが付き、隣接してピット1基が付属。中央付近にはわずかに貼床とみられる硬化面が残り、埋土からは紡錘車（2013）が出土している。

301A 9号（SI 301A 9、第13・20図、図版4）A 9地区南西。カマドと煙出の痕跡を確認。長方形プランの中央部が一段低い。

709A 11号（SI 709A 11、第13・27図、図版4）A 11地区東。北西隅にカマドが付き、西壁側には棚状の段がある。床面に転がる河原石は袖石か。

201A 8号（SI 201A 8、第12・13図）A 8地区南端で、カマド部分中心に検出。煙道らしき痕跡あり。

701A 1号（SI 701A 1、第12・14図、図版3）A 1地区で密集する竪穴建物のひとつ。複数の遺構と重複するため内部施設等は不明確だが、SK 737A 1が付属している可能性がある。

702A 1号（SI 702A 1、第12・14図）東壁付近の焼土溜まりから、東壁にカマドが想定される。

708A 1号（SI 708A 1、第12・16図、図版3）東壁中央にカマドが付き、両袖の袖石が位置を留める。燃焼部埋土には炭化物が多く、建物本体の埋土には礫が多く混入している。

731A 1号（SI 731A 1、第12・14図）SI 732A 1より新。床面が硬化しているが、詳細は不明。

732A 1号（SI 732A 1、第12・14図）SI 731A 1より古。北壁は試掘溝により欠損しているが、中央にカマドが付くとみられ、両袖部分と燃焼部の痕跡がある。

734A 1号（SI 734A 1、第12・15図）SI 735A 1より古。壁溝が巡る。

735A 1号（SI 735A 1、第12・15図）断面観察からSI 734A 1より新しいとみられるが、上層遺構の影響により正確な平面プランは不明。壁溝を確認した。

740A 1号（SI 740A 1、第12・15図）半分を検出した。南壁中央やや西寄りにカマドが付き、燃焼部の埋土には焼土や炭化物が多量に残存。また、両袖に袖石が1個ずつ残る。

744A 1号（SI 744A 1、第12・17図）調査区北端で一部検出。南壁にカマドが付くとみられ、燃焼部と煙出の一部の痕跡を確認した。

745A 1号（SI 745A 1、第12・18図）SI 701A 1、SI 702A 1より古くSI 853A 1より新しい。

749A 1号（SI 749A 1、第12・16図）北壁の一部は試掘溝により欠損。不整形で埋土はうすい。

781A 1号（SI 781A 1、第12・19図）部分的な検出にとどまる。壁溝が伴う。

802A 1号（SI 802A 1、第12・17図）方形のプランをもつ。カマドの位置は不明。床面で検出したSK 811A 1、SK 819A 1は付属遺構の可能性がある。

805A 1号（SI 805A 1、第12・17図）コーナー部分を検出。方形プランで床面はやや硬化している。SK 818A 1が付属する可能性がある。

806A 1号（SI 806A 1、第12・18図）SI 702A 1より古く、床面はやや硬化している。SK 814A 1が付属する可能性がある。

807A 1号（SI 807A 1、第12・18図）方形プランの東北隅にカマドが付く。燃焼部には支脚となる河原石が黒く焼けた状態で残り、埋土には焼土と炭化物を多量に含む。また床面で焼土溜まりを2箇所検出した。

842A 1号（SI 842A 1、第12・19図）壁溝をもつが、検出時の埋土はうすく、詳細不明。

848A 1号（SI 848A 1、第12・19図）北向きのカマドのみ検出。燃焼部にはわずかに焼土、炭化物が残る。袖石の一部と煙道も確認できた。

853A 1号（SI 853A 1、第12・19図）一部を検出。SI 745A 1より古い。

1139A 2号（SI 1139A 2、第20・23図）西側に狭いテラス状の段がある。床面はやや硬化する。

1140A 2号（SI 1140A 2、第20・24図）北壁東寄りにカマドが付き、燃焼部埋土には炭化物を含む。煙出部分は礫層が隆起しており不明。床面がやや硬化する。

1141A 2号（SI 1141A 2、第20・21図、図版6）A 2地区北で竪穴建物が集中する部分。南東隅で東向きのカマドを確認した。両袖に各々3個の袖石を検出したが、左袖側は崩れた痕跡のみである。床面はわずかに硬化している。

1159A 2号（SI 1159A 2、第20・23図）SI 1139A 2より古い。

1186A 2号（SI 1186A 2、第20・21図）床面がやや硬化している。建替えか重複があった可能性があるが、詳細は不明。

1188A 2号（SI 1188A 2、第20・23図）調査区外南へ続く。床面やや硬化。

1192A 2号（SI 1192A 2、第20・23図）東壁中央にあるSK 1207A 2はカマドの痕跡とみられる。床面はやや硬化するが、攪乱等もあり不明な部分が多い。

1194A 2号（SI 1194A 2、第20・25図）SI 1195A 2より古く、埋土に礫が多い。

1195A 2号（SI 1195A 2、第20・25図）東壁にカマドが付き、煙出の天井部と炭化物を含む埋土が残存していた。左袖は試掘溝で一部欠損。部分的に残る貼床の上には焼土ブロックがある。

1205A 2号（SI 1205A 2、第20・21図）SI 1141A 2より古い。床面はやや硬化。

1209A 2号（SI 1209A 2、第20・22図）床面でSK 1231A 2を検出した。

1214A 2号（SI 1214A 2、第20・22図）残りが良くないが壁溝が巡るとみられる。床面はやや硬化しているが、ブロック状の混入が多く、貼床状の造成か。

1217A 2号（SI 1217A 2、第20・23図）カマド等は不明。床面はやや硬化する。

1240A 2号（SI 1240A 2、第20・22図）SI 1209A 2より古く、床面はやや硬化する。

1251A 2号（SI 1251A 2、第20・21図）古代上層SI 1182A 2が切り合うため南壁は不明である。断面観察では南側がより炭化物を多く含むことから、カマド等の施設が想定される。

1255A 2号（SI 1255A 2、第20・25図）平面プランは不明瞭。カマドは試掘溝によって消失し、わずかに確認できたのはSI 1195A 2 カマド北側と重複する部分と焼土のみである。

### 3 遺構

1301A 2号（SI 1301A 2、第20・26図）壁溝が巡り、床面はやや硬化する。

1302A 2号（SI 1302A 2、第20・26図）床面は礫層に達する。少量の炭化物を含むピットが付くとみられる。

1313A 2号（SI 1313A 2、第20・26図）床面がやや硬化。埋土から土器が多く出土した。

1327A 2号（SI 1327A 2、第20・26図）SI 1430A 2より古く、床面はやや硬化する。

1337A 2号（SI 1337A 2、第20・26図）重複する遺構より新しい。平面プランは不整形である。

1338A 2号（SI 1338A 2、第20・26図）整然とした方形プランで、床面はやや硬化している。

1339A 2号（SI 1339A 2、第20・26図）SI 1194A 2と重複。遺構上部は失われているとみられる。

1430A 2号（SI 1430A 2、第20・26図）埋土は非常に浅い。床面はやや硬化。

### C 溝

717A 11号（SD 717A 11、第29図）A 11地区を南北方向に流れる自然流路か。

1077A 4号（SD 1077A 4、第27・29図）A 4地区の最下層で南北に流れる幅広い自然流路。

1353A 2号（SD 1353A 2、第29図）A 2地区東からA 3地区南東隅のSD 306A 3へと続く自然流路。

306A 3号（SD 306A 3、第29図）前出のSD 1353A 2と同一遺構で、古墳時代初頭（白江式）の甕（29）が完形で出土した。

### 中層（全体図：第9図）

A 1地区北端～A 9地区南側、A 4地区北側、A 10地区北側、C 4地区南端など、限られた範囲に遺構が分布する。

#### A 壓穴建物

349C 4号（SI 349C 4、第10・31・41図）C 4地区南端で、古代上層のSI 301C 4に切られる。方形プランで、内部は壁際がテラス状に段をなし、床面中央部が一段低い構造である。東壁にカマドが付き、燃焼部埋土には焼土、炭化物が混ざる。

353C 4号（SI 353C 4、第10・31・41図）SI 349C 4の床面下で、全体の半分程を検出した。

787A 4号（SI 787A 4、第30・32図）A 4地区北で複数の壓穴建物が集中するもの。方形プランの南西壁中央にカマドと考えられる張り出しがある。

812A 4号（SI 812A 4、第30・32図）プラン不整形で浅い。床面西端にピットをもつ。

814A 4号（SI 814A 4、第30・31図）A 4地区北で壓穴建物が集中するもの。他の壓穴との重複はない。南西隅にピットが付くとみられる。

818A 4号（SI 818A 4、第30・32図）重複箇所が大半で、全体は不明瞭。西壁にカマドが付き、埋土に炭化物の比率が高い。

819A 4号（SI 819A 4、第30・32図）北西壁にカマドの痕跡とみられる張り出しがある。

820A 4号（SI 820A 4、第30・32図）SI 819A 4に切られる。北東壁にわずかなカマドの痕跡。

821A 4号（SI 821A 4、第30・32図）方形のプランとみられるが、SI 818A 4に切られる。

822A 4号（SI 822A 4、第30・32図）菱形の不整形なプラン。SI 821A 4に切られる。

201A 9号（SI 201A 9、第31・34図、図版7）A 9地区西に位置。北西隅がやや張り出し、そこにピットを検出した。カマドに関連するものか。床面底は凹凸があり、酸化鉄の沈着がみられる。

202A 9号（SI 202A 9、第31・34図、図版7）A 9地区中央部。床面底部に酸化鉄が多い。

213A 9号（SI 213A 9、第31・34図）A 9地区東端で一部を検出。壓穴建物にしては面積が小さいが、

床面の一部と考える。

#### B 土坑

318A10号（S K318A10、第33図）A10地区北に位置する。酸化鉄を含む埋土で、ごく浅い。

319A10号（S K319A10、第33図）酸化鉄を含む埋土で、ごく浅い。

322A10号（S K322A10、第33図）北東の張り出しをカマドとする竪穴建物の可能性あり。

830A4号（S K830A4、第30・33図）竪穴建物の可能性が高く、S K831A4を伴う。

902A4号（S K902A4、第30・33図）カマドに関連する可能性がある。

903A4号（S K903A4、第30・33図）不整形なプランだが、竪穴建物の可能性が高い。

#### C 溝

700A1号（S D700A1、第34・35図）L字状に曲がる。畠の畦溝か。

205A9～212A9号（S D205A9～212A9、第34・35図）畠の畦溝とみられ、規則的な配列をとる。

### 上層（全体図：第10・11図）

古代の中で最も遺構が多く、特に竪穴建物の集中度が高い。A1～A4、A7、A11、B13、C2、C4地区で検出した。

#### A 竪穴建物

201C2号（SI 201C2、第36・37図）南西隅にカマドが付き、炭化物が厚く堆積している。また、カマド側の壁には棚状の段が残る。内部から多数の土器（図版48）が出土した。

202C2号（SI 202C2、第36・38図）北壁中央にカマドが付き、床面積がやや広い。

203C2号（SI 203C2、第36・37図）SI 201C2と重なる北隅にカマドが付く。

204C2号（SI 204C2、第36・39図、図版8）東南壁の中央付近にカマド。北東隅には割れた袖石か、河原石がまとめて置かれている。床面には炭化物の詰まった土坑を伴い、わずかに骨片の混入がみられた。また、床面および埋土からは多数の土器（図版49）が出土した。

206C2号（SI 206C2、第36・40図）方形プランをもつ。カマド等の痕跡はない。

207C2号（SI 207C2、第36・40図）SI 209C2より新しい。隣接するSI 206C2より一回り大きな方形プランである。

208C2号（SI 208C2、第36・39図、図版8）竪穴の掘形は一続きになっているが、gセクション以西はSI 213C2、SI 214C2に切られている。カマドは南東隅か東壁南寄りと推測され、炭化物の入った小さいピットが付く。

209C2号（SI 209C2、第36・40図）SI 207C2より古く、埋土に酸化鉄を少量含む。

210C2号（SI 210C2、第36・39図、図版8）北東壁にカマドが付くが、上にSI 213C2のカマドが築かれたため欠損しており、炭化物がわずかに残るだけである。

213C2号（SI 213C2、第36・39図、図版8）SI 208C2と竪穴の掘形が一続きになっているが、gセクション以西部にあたり、SI 208C2より新しい。また南側で入り組んだように重なるSI 214C2よりも新しい。北隅にカマドが付き、袖石や炭化物の広がりがみられる。

214C2号（SI 214C2、第36・39図、図版8）重複によりプランは不明瞭だが、南西部にカマドが付き、焼土、炭化物がわずかに認められる。

215C2号（SI 215C2、第36・39図、図版8）SI 204C2、SI 208C2より古い。一部を検出。

216C2号（SI 216C2、第36・38図）東壁にカマドが付き、煙出、袖石が残る。燃焼部には焼土が厚

### 3 遺構

く堆積し、火床部、袖部の被熱痕が明瞭に残る。また北壁際には棚状の段が付く。

301C 4号（SI 301C 4、第41・42図、図版9）埋土、床面から河原石が出土。袖石とみられるが、焼土や炭化物は確認していない。

302C 4号（SI 302C 4、第41・42図、図版9）北西隅にカマド。周辺から土器が出土した（図版48）。

303C 4号（SI 303C 4、第41・42図、図版9）方形プラン。袖石とみられる河原石が散在する。隣接するSI 302C 4に比べ、小ぶりである。

701B 13号（SI 701B 13、第43・44図、図版7）B 13地区南寄り。西壁中央付近に土器集中地点があり、割れた自然石が認められた。その下には焼土、炭粒等が堆積しておりカマド痕跡とみられる。東壁付近では埋土上層から奈良三彩火舎が出土。その他多数の土器が出土した（図版50）。

702B 13号（SI 702B 13、第43・44図）東壁がふくらみ、カマド痕跡とも見えるが炭化物等はない。

703B 13号（SI 703B 13、第43・44図）不整形なプランであるが、遺物が多く出土している。

106A 7号（SI 106A 7、第44・148図、図版4）A 7地区で中世の遺構と同時に検出した。上層の溝により西半分は破壊されている。東壁にカマドが付き、土師器甕が出土した。

652A 4号（SI 652A 4、第45・46図、図版9）北壁中央にカマドが付く。土器が多数出土（図版50）。

653A 4号（SI 653A 4、第45・47図）北東隅にカマド痕跡。炭化物をわずかに含む。

660A 4号（SI 660A 4、第45・47図）SI 653A 4より古い。酸化鉄が沈着している。

661A 4号（SI 661A 4、第45・46図）北壁中央にカマドが付き、炭化物の堆積がみられる。

663A 4号（SI 663A 4、第45・48図）北壁が欠損しているが、壁溝が巡る。

664A 4号（SI 664A 4、第45・48図）方形プランで重複部分が多い。

665A 4号（SI 665A 4、第45・48図）プランは不整形で北側にカマドとみられる張り出しがある。

666A 4号（SI 666A 4、第45・48図）南東に張り出した部分はカマド痕跡とも考えられる。

667A 4号（SI 667A 4、第45・47図）試掘溝で北壁は欠損。床面中央付近に焼土を検出した。

675A 4号（SI 675A 4、第45・48図）試掘溝で南壁は欠損。床面に浅い焼土が2箇所で広がる。遺構上部は欠損しているが、上層から甕、横瓶をはじめ土器が多数出土した（巻首図版3）。

677A 4号（SI 677A 4、第45・47図）床面のみを検出した。プランが不整形で浅い。

679A 4号（SI 679A 4、第45・46図）北壁やや東寄りにカマド。SI 661A 4より古く、一回り小さい。

683A 4号（SI 683A 4、第45・47図）重複が激しく、プランは不明。東壁にカマドが付くとみられる。

684A 4号（SI 684A 4、第45・46図）SI 661A 4より古い。北壁に付くとみられるカマド周辺のみ検出した。

687A 4号（SX 687A 4、第45・47図）炭化物を含むカマド関連遺構とみられるが、帰属する建物は不明。

688A 4号（SX 688A 4、第45・47図）竪穴建物のカマドで、床、袖部の痕跡があるが帰属不明。

702A 4号（SX 702A 4、第45・47図）煙道を含むカマド部分のみを検出、帰属する建物は不明。

704A 4号（SX 704A 4、第45・47図）カマドで、床、袖部が残るが建物は不明。

707A 4号（SI 707A 4、第45・47図）床面のみ確認したが、プラン、埋土とも不明瞭。

708A 4号（SX 708A 4、第45・47図）焼土が残るが、浅く不明瞭。

850A 4号（SI 850A 4、第49・50図）建替えがあり、第49図1が第1面（新）、第49図2が第2面（旧）である。建替え後、カマドは南西隅からやや東へ移るが、新しいカマドの右袖は旧カマド左袖部分に重ねて築かれている。遺物はどちらの面に属するものか識別できないが、大きな時期差はみられない。第1面ではカマド周辺に貼床が残り、燃え滓のような炭化物の堆積や焼土ブロックも点在してみられ、周囲の竪

穴建物のなかでは比較的残りが良い状態であった。須恵器の大甕をはじめ出土土器が多い（図版45）。

851A 4号（SI 851A 4、第49・50図）SI 850A 4より古く、南東壁北寄りにカマドが付く。

852A 4号（SI 852A 4、第50図）方形プランで、北西にカマドが付く。床面から多数の土器片が出土した。

853A 4号（SI 853A 4、第50図）方形プランとみられる。南西に付くカマドはSI 852A 4と重複。

861A 4号（SI 861A 4、第51・52図、図版11）北壁にカマドが付き、炭化物や焼土の堆積を確認した。袖部の高まりは欠損しているが、袖石とみられる河原石が散在する。西側に位置するカマドについては、埋土中で検出したものであり、別遺構のカマドと考えられる。ただし、挿図では「西カマド」として一括記載した。

1010A 4号（SI 1010A 4、第45・54図）東壁は調査区外。北西隅にカマドが付き、袖石や炭化物等を検出した。

1015A 4号（SI 1015A 4、第45・46図）A 4地区南寄りで竪穴建物が集中するもの。西壁中央にカマドが付き、袖石が残る。

1082A 4号（SI 1082A 4、第45・53図、図版11）重複するSI 1083A 4より新しいとみられるが、プランや埋土の識別が非常に困難であった。北西隅に付くと考えられるカマドは、プランから外れた位置にあるため、建替え、または別遺構の可能性がある。

1083A 4号（SI 1083A 4、第45・53図）SI 1082A 4に先行する竪穴建物で、やや小型。南西隅にカマドが付くが、炭化物等の堆積はほとんど失われている。

1084A 4号（SI 1084A 4、第45・53図）SI 1082A 4より古い。プラン等、残りが悪く確実性に欠ける。遺物出土状況から、南にカマドが付くようである。

1085A 4号（SI 1085A 4、第45・53図）重複の下層に位置し、一部を検出したにとどまる。

1086A 4号（SI 1086A 4、第45・53図）カマド周辺のみ検出した。プランは不明。カマドには焼土や炭化物が残る。

1120A 4号（SI 1120A 4、第45・53図）SI 1082A 4より古い。プラン不整形。埋土には酸化鉄を含む。

1410A 4号（SI 1410A 4、第50図）北側でSI 850A 4と重複。南西隅にのみ硬化面が残る。また南西付近に炭粒混じりの堆積がみられ、この方角にカマドが付く可能性がある。床面には炭が詰まったSK 1408A 4が伴う。

1412A 4号（SI 1412A 4、第52図、図版10）SI 1424A 4と同様、重複の古段階で、プランは不明。西隅にカマドが付くとみられ、炭混じりの堆積物を検出した。

1413A 4号（SI 1413A 4、第51・52図、図版10）東壁はSK 1414A 4、SK 1416A 4との重複により正確な立ち上がりは不明。東にカマドが付き、袖石が据えられた状態で残る。床は貼床を確認していないが、堅く締まっている。

1420A 4号（SI 1420A 4、第51・52図）SI 861A 4と重なる部分にカマドとみられる土坑がある。

1424A 4号（SI 1424A 4、第52図）竪穴建物が濃密に重複するなかでも、古段階に属す。新段階の遺構に壊された部分が多く、全体のプランは把握し難い。ただし、北東隅のカマドは比較的残りが良く、据えられた状態の袖石のほか、焼土、炭化物の堆積を確認した。

201A 3号（SI 201A 3、第55・56図、図版12）A 3地区北側。東壁中央にカマドが付く。据えられた状態の袖石が残り、焼土、炭化物を確認した。出土遺物には底部に刻書された甕（505）がある。

202A 3号（SI 202A 3、第55・57図）床面の痕跡をとどめるのみで、施設等は不明。

203A 3号（SI 203A 3、第55・56図）南東壁中央にカマドの痕跡とみられる土坑を伴う。北東の壁際に